

多久茂文公が300年前になぜ、東原庠舎を開校し、聖廟を建立したのかは本誌先月号で紹介しましたが、その多久聖廟の建物にも不思議がいっぱいです。随所に込められた創建者の思いは、いにしえは勿論、私たちが生きる時代、そして、その先の未来も、平和で豊かな社会であることを願ったものでした。今月の特集は、それを物語る聖廟内外の装飾文様に触れてみましょう。

知るの すすすめ

多久にしかない
宝物

300年の時空を超え 孔子の里から風が吹く

多久聖廟は「敬いの心」の形

孔子の徳の高さを表す『仰高門』の先に、力強く厳かにたたずむ『多久聖廟』は、孔子の教えや学問を重視した300年前の領主が、多久の平和と領民を思い、孔子を祀り、その教えを形にして示した建物です。

「敬は一心の主宰、万事の根本にして、万世聖学の基本たり」という儒学の「敬いの心」を基本に、人づくり、まちづくりを進め、領民すべてが共有することで、多久領の人や地域が甦ったのでした。以来、人々の心の寄り所となった聖廟は、大切にされ、300年の時を刻んだ今も多久市のシンボルとなっています。

また、学業祈願などに全国各地から参拝客が訪れ、1年の幸せを願う初詣のスポットとしても有名です。

学問の神様と登竜門

聖廟が学業祈願に魅力があるのは、論語で有名な学問の神様『孔子』を祀るからです。もうひとつ秘密があります。それは、「登竜門」の語源でもある鯉が滝を登り試練を超え、龍に変身するという鯉の文様がある梁。この下をくぐると合格すると受験生に好評で、中国の伝説から鯉は立身出世の象徴なのです。

参拝客を喜び招き入れる吉祥文様

この鯉をはじめ、外観だけでも、鬼面、鳳凰、龍、象、鯢、竹など、孔子にちなんだ聖獣や吉とされる動植物が数多く彫刻されています。

例えば、鬼面は「饗餐」とも呼ばれ、中国神話の怪物で、何でも食べることから、食に困らないお守りや魔除けに使われ、人間の悪い心も食べてくれると言われます。

鳳凰は、瑞獣のひとつで、天上界から衆人を大きく招いている姿で、羽を持った鳥類の長とされる幸せを呼ぶ鳥です。これらがある向拝部分は、参拝客を喜び招き入れる意味がある吉祥的文様が施され、聖なる場所であることも示しているのです。

孔子を敬う廟内の装飾・彫刻

また、廟内本堂の壁には孔子誕生の時に現れたという伝説がある孔子ゆかりの動物「麒麟」の彫物、天井には究極の幸運のシンボル「蟠龍」を描き、孔子の誕生・吉祥の世（敬）を願い、その奥にある室には星宿、雲龍が彫刻。神壇、聖龕、孔子像などには、孔子の遺徳と瑞祥を願う心で、それぞれ意味を持った色々な装飾文様が施され、紹介しきれないほどです。ただ、廟の中は普段拝見で